胃癌ニ關スル統計的觀察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31029

胃癌ニ關スル統計的觀察

金澤醫科大學泉外科教室
中田秀全述

一、緒言

世ニ難治トセラルル病多シト雖未ダ胃癌程難治中ノ難ナルモノ無カルベシ。然モ夫レノ發生スルハ人生ノ最モ圓熟セル活動期ナリ。而シテ其死亡數タルヤ實ニ全死亡者ノ一―二%ノ間ニ有リ。故ニ本病ハ單ニ患醫ノ問題タルニ止マラズ社會上或ハ人道上ノ大ナル問題タルベシ。サレバ心アル人ハ聲ヲ嗄ラシテ警鐘ヲ亂打シ早期ニ手術シ根本治療ノ法ヲ薦ムルモ未ダ世ノ反響少ク然モ醫人ニ尙其理解少キヲ恨ム。

凡ソ醫タル者病者ヲ指導スルコソ本分ニシテ是レガ爲ニハ豫防ヲ講ジ或ハ適確ナル診斷及治療ヲ要ス。殊ニ癌ノ如ク一時ノ遲一日ノ滯ハ其治否ノ岐ルル所ナルヲ以テ遲疑スルコトナク宜シク明快ナル根治療法ニ訴ヘ濟生ノ慈ニ浴セシメ胃癌ノ根治ニ對スル世ノ疑惑ヲ解キテコソ其職分ヲ完フセル者ト云フベシ。

胃癌ニ對スル手術成績ハ種々ナル人ニ依リ各樣ナル成績ヲ以テ報告セラル。我教室ニテモ既ニ大正十四年五月先輩日江井稔嗣氏ニ依リテ詳細ニ報告セラレタリ。（臨床醫學第十三卷、第十、十一號、大正十四年十、十一月發行）

其後我々ノ經驗ハ更ニ年月ニ於テ二倍シ患者數ニ於テ三倍ノ多キニ達シタリ。余幸ニシテ是レガ手術成績殊ニ其永久治癒成績ヲ觀察シ得タルヲ以テ聊カ之レガ記載ヲ試ミント欲ス。唯ダ余ノ淺學菲才ハ恩師泉先生ノ不斷ナル努力ニ依リ收メラレタル五ケ年間ノ精華ヲ創ケン事ヲ懼ル。一ニ諸賢ノ御諒恕ヲ乞フ。

二、期間及患者數

大正十二年一月ヨリ昭和二年十二月ニ至ル滿五ケ年此ノ間我外來ヲ訪ヒ胃癌ノ診斷ヲ受ケタル者二百九十八名中入院シ各種檢査ニ由リ胃癌ノ確診セル者百六十八名ニテ切除術ヲ施セル者七十五名、姑息的手術ヲ爲セルモノ三十四名、單開腹術ニ終レルモノ四十三名ナリ。

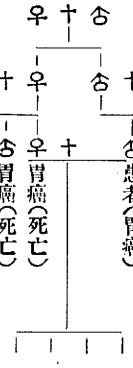
切除率ハ左表ノ如ク四九・三%ニシテ這ハ我教室ノ技術ノ進歩或ハ機械ノ改良術式ノ撰擇等又一方積極的適應症ノ採用等辛苦艱難ノ結晶ニシテ早期手術例ノ增加セルニハ非ズ。是レヲ諸大家ノ切除率ニ比スルニミクリッツ氏ノ二五・一%、メーヨ氏ノ三五・一%、キットナー氏ノ三三・〇%、アンシュッツ氏ノ四八・〇%、三宅博士ノ四五・五%等ヨリ遙カニ高率ヲ示ス。此ノ主因ハ前記積極的適應症ニ據ルモノニシテ七十六例ノ胃癌切除例中膵臓ノ一部ト共ニ剔出セルモノ一例、膽囊剔出二例、横行結腸剔出五例、胃全剔出二例、胃亞全剔出三例ヲ含メルヲ見ルモ如何ニ切除ニ努力シタルカヲ窺知スベシ。而シテ常ニ此ノ積極的切除主義ヲ採レル理ハ後段胃癌切除術ノ効果ノ條下ニ於テ述ブル所ニ依リ明ナルベシ。

胃癌手術年度別

術式＼年度	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年	昭和二年	總計
切除術	七	一二	二八	一六	一二	七五
姑息的手術	四	四	一一	九	五	三三
單開腹術	六	一〇	一二	九	七	四四
合計	一七	二六	五一	三四	二四	一五二
切除百分率	四一・一%	四二・三%	五四・九%	四八・二%	五〇・〇%	四九・三%

三、遺傳性竝ニ性及年代的關係

余ハ百六十七名ノ胃癌患者ヲ調査セルニ其血族的關係ニ於テ二十九名卽チ一七・三%ノ素因的關係ヲ有スルモノヲ認メ山極博士ハ一二・〇%ヲ三宅博士ハ一六・〇%ヲ記載セラル。而シテ未ダ腫瘍ノ發生ニ對スル見解不明ナル今日遺傳性ノ有無素ヨリ分明ナラザルモ吾々ハ家族歷ニ於テ遺傳性ヲ輕擧ニ否定シ難キ實例ニ遭遇スルコト屢々ナリ。サレバ單ニ老人病トカ或ハ偶然ト云ヘバ夫レ迄ナラムモ今一歩進メテ考フレバ火ナキ所煙立タズノ金言ノ適中セザルヤヲ惟フモノナリ。左ニ記スルハ其一例ニ過ギズト雖廣ク世ノ同例ヲ求ムルナラバヨリ多クノ好適例ヲ求メ得ルナラム乎。



性ニ就キテハ男八〇・〇%、女二〇・〇%ノ比ヲ求メ得テ略々諸家ノ調査ニ近カシト雖歐米諸國ノ調査ハ我國ノソレニ比シ女子ノ率遙カニ多シ這ハ我國特ニ北國地方ニテハ女子ノ外科家ヲ訪フコト少キニ依ルベシ。

年代的關係ハ四〇—五〇代ヲ最多トシ我教室ニテ最低年齡ノ記錄ハ二十二歲、最高年齡七十一歲ナリ。尙ホ十四—十五歲ノ胃癌患者ヲ報告セルヲ見レバ慢性ナル胃症狀ヲ有スル患者ニ對シ若年ノ故ヲ以テ癌ヲ考慮ニ置カズ檢索ヲ怠ルハ醫ノ愼ムベキコトナリ。

胃癌患者ノ年代及性

年代	二〇—二九	三〇—三九	四〇—四九	五〇—五九	六〇→	計
男子	一	一五	四五	四七	一四	一二二
女子	四	七	九	五	五	三〇
計	五	二二	五四	五二	一九	一五二
年代百分率	〇・三	一四・〇	三五・三	三四・二	一五・九	

四、症狀及診斷

古來幾多ノ學者本症ノ早期診斷ニ向ツテ全力ヲ注グト雖未ダ一ツモ吾人ノ實用ニ供セラルル特異的價値ヲ有スルモノナシ。從テ轉移浸潤ノ無キ理想的早期手術ヲ行フノ機會ヲ失スル又止ムヲ得ズト雖今少シク『荏苒治セズ漸次衰弱ノ兆アル胃「カタール」ハ胃癌ニ疑診ヲ置クベシ』ノ名言ニ思ヲ致シテ患者ヲ診ルナラバ今日外科家ノ觀ル如キ時期ヲ失セル患者ヲ驅逐シ得ルコト蓋シ容易ナルベシ。試ミニ余ノ調査セル所ヲ觀ルニ手術患者百五十二例中胃部腫瘤ヲ主訴トセルモノ四十九例甚ダシキハ腫瘤竝ビニ嘔吐ヲ訴ヘシモノ二十三名ニシテ食欲減退ノミヲ訴ヘシ者僅々二名ニ過ギズ之レニ依テ觀ルモ現代ノ胃癌ニ對スル知識ノ貧弱ナルヤ想像ニ餘リアリ。

凡ソ本症ノ症狀タルヤ早期ニハ所謂慢性胃「カタール」ト稱スベキ程緩慢ナル胃症狀ヲ呈シ進ミテ腫瘍ヲ生ジ次第ニ全身症狀ヲ併發スル者ニシテ再ビ起ツ能ハザル必死ノ病ナリ。

吾人ノ欲スルハ限局セル腫瘍ニアリ。卽チ醫ノ細心ナル注意ヲ以テ觸知セルカ或ハ熟練セル醫家ノ「レントゲン」線檢査ニテ漸ク發見シ得ル程度ニ於テ切除セント希フモノナリ。

觸診法　一度熟練セバ指頭ニ眼ヲ有セザルヤヲ疑フ程其鋭敏度ヲ增スモノナレドモ之レガ檢査方法又緊要ナリ。卽チ早朝空腹時ニ於テ仰臥位、左右側臥位、半座位、及立位等ノ體位ヲ採リテ觸診スルコトナリ。殊ニ半座位及立位ニ於テ一杯ノ水ヲ飲用セシムル事ハ吾人ノ日常「レントゲン」線檢査ニ當リ冷バリウム液ヲ飲用セシメタル後ニ於テ以前ニ觸知困難ナリシ腫瘤モ容易ニ觸知シ得ル經驗ニ依リ明ナリ。

腫瘍移動性ノ有無ハ周圍臟器トノ癒着ノ有無ヲ察知セシメ切除能否ノ岐ルル所ナレバ心シテ檢スベキ事ナリ。一般ニ老人ハ內臟ノ靭帶弛緩セル者ナレバ斯ノ如キ症例ニ就キテハ一層ノ注意ヲ要ス。

吾人ノ最モ本症ト誤ルハ十二指腸潰瘍及膵臟腫瘍ナリ。是等ハ抵抗或ハ腫瘍、壓痛等ノ所在殆ンド胃部ニ接スルヲ

以テナルモ斯ノ如キ場合ニ「レントゲン」線檢査ハ最モ必要ナリ。

「レントゲン」線檢査法ハ全ク胃ノ空虛時更ニ必要ニ應ジテハ胃洗滌後行フベシ。「バリウム」液ハ成ルベク濃厚ニシテ胃體ヲ充タスヲ可トシ多量ニ用フル時ニ見逃スコト少ク不足量ハ所見ヲ不充分ナラシム。尙ホ本症ニ疑アリ一回ノ「レントゲン」線檢査ニテ不明ナリシ時ハ數回反復施行シテ初メテ所見ヲ得ルコトアリ。

本檢査法ニテハ腫瘍ノ直徑三糎ノ者迄檢出シ得ルコトハメーヨ氏ノ報ズル所ニシテ我教室ニテモ亦同樣ノ結果ヲ收メツツアリ。

又觸診法及「レントゲン」線檢査ノ成績ヲ比較スルニ手術ニ由リ腫瘍ノ存在ヲ確メタル百四十九例中術前觸知シ得ザリシモノ二十九例卽チ一九·七%此ノ中「レントゲン」線檢査無キ四名ヲ控除シ「レントゲン」線檢査陽性ナルモノ二十例全ク陰性ナリシモノ五例ナリ。

又手術ニ由リ腫瘍ヲ認メタル百三十一例中術前「レントゲン」線檢査陰性ナルモノ九例卽チ〇·六%ノ少數ナリ。斯ノ如ク「レントゲン」線檢査ハ良好ナル成績ヲ收メ且ツ三糎大ノ腫瘍卽チ無障切除術可能ノ時期ニ腫瘍ヲ發見シ得ルモノナレバ胃癌ノ診斷ニ對シテハ必須ノ方法タルベキヲ信ズ。

其他遊離鹽酸ノ缺亡、乳酸ノ出現、潛出血ノ存在等ハ診斷ノ參考資料トシテ重寶タルヲ失ハズ。

右ニ述ベタル如ク症狀及診斷ニ於テ今日未ダ絕對的ノ者ナキヲ以テ癌ノ潛在ヲ疑ハシムル場合ニハ須ラク試驗的開腹術ニ訴ヘテ癌ノ疑雲ヲ拂ヒ或ハ理想的早期切除術ノ惠ニ浴セシムベキハ醫タル者ノ責務タルベシ。

玆ニ一言スベキハ今日尙ホ試驗的開腹術ト單開腹術トヲ混同シ徒ラニ恐怖ヲ抱ク風習アルハ慨嘆ニ堪ヘザル所ナリ。

試驗的開腹術ハ前述ノ如ク一沫ノ疑念ヲ抱ク時期ニ施行スルモノナルヲ以テ患者ハ殆ンド健康ト見做スベク又切開範圍極メテ小ニシテ僅カ七—八糎ノ腹壁切開ニテ足レリ。サレバ手術的侵襲タルヤ不問ニ附シテ可ナリ。然ルニ單開腹術トハ殆ンド術前既ニ切除ノ餘地ナシト雖患者ノ懇望モダシ難ク一縷ノ望ヲ姑息的手術ニ囑シ其苦痛ヲ救ハントス

ル外科家ノ温情ヨリ發スルモノナレバ切開小ナリト雖患者ニハ大ナル侵襲トシテ影響シ從テ豫後ノ惡シキ場合ヲ來タスコト稀ナリトセズ。故ニ此ノ兩者ヲ區別シ理想的早期手術ノ機會ヲ多ク作リテコソ初メテ切除術ノ本懷ヲ達スル事多ク世ノ同病者ヲ救フヲ得ベシ。

五、療法及其成績

現今行ハルル根治療法ハ外科的手術ニ據ルモノナレ共「レントゲン」線療法亦用ヒラル。然レ共這ハ胃癌ニ對シテ無力ナルハ既ニ定評アル所ナリ。

內科的療法卽チ藥物療法ハ何等核心ニ觸レザル方法ニシテ對症的ニ處置スルモノナリ。未ダ効アルヲ聞カズ。

余ノ調査セル所ニ就キ聊カ批判ヲ加ヘンニ一般ニ內科的療法ニテハ初發症狀ヨリ終末迄平均十二ケ月ト云ハルルモ余ハ潰瘍癌ヲ除外シテ一〇·七ケ月ノ平均値ヲ得タリ。

單開腹術施行後內科的治療ニ委シタル者ハ發病ヨリ死ニ至ル迄平均八·三ケ月ニシテ內科的療法ノ場合ヨリ生存期間短カキハ前記ノ理由ニ據リ明ナリ。

切除不能ニシテ幽門狹窄ヲ有シ吻合術ヲ施セル三十三例ニ就キテ觀察スルニ、由來姑息的手術ニ於ケル胃腸吻合術ハ生理的及解剖的ノ狀態ニ近カラシメントスル理ニ據リ出來得ル限リ結腸後胃腸吻合術ヲ施行スルモノナルモ、事實本法ハ癌浸潤ヲ來タスコト早ク又屢々結腸內容停滯時ニ其重力ニ依リ結腸間膜緊張シ爲メニ空腸ハ絞扼セラルルコトアリ。サレバ結腸前吻合術兼ブラウン氏腸々吻合術ヲ行フ場合多ク其成績又可良ナリ。

本姑息的手術ニ對シ諸家ハ內科的療法ニ比シ二—三ケ月ノ生命延長ヲ認ムト報ゼラルルモ、是レニ對スル見解ハ其材料ノ條件ニ依リ異ナルコト勿論ナリ。我教室ニ於テハ一〇·五ケ月卽チ內科的治療ニ委シタルト遜色ナシ。本手術ハ元來外科的對症療法タルヲ以テ目的ハ患者ノ苦痛ヲ減ジ發生セル癌ニ對スル刺戟ヲ減ジ其發育ヲ緩徐ナラシメントス

ルモノナリ。故ニ我教室ノ如キ積極的切除術ヲ目的トスル場合ニハ其材料ノ低下スルコト當然ニシテ二—三ケ月ノ生命延長ナシトテ怪シムニ足ラズ。充分其目的ヲ達セル者ト云フベク對症療法トシテ價値アルモノタルハ疑ヲ容レザル所ナリ。

胃癌切除術

癌ニ對スル療法中絶對的價値ヲ有スルハ切除術ヲ措テ他ナキハ何人モ異議ナキ所ナルモ之レニ對スル適應症ノ範圍ニ至リテハ種々ナリ。消極的切除術ハ死亡率小ニシテ一見良好ナル成績ヲ得ル如シト雖遠隔成績ハ積極的切除ト大差ナシ。而シテ積極的切除ナルガ故ニ死亡率倍加セズ。切除術ノ本領ヲ忘レテ末節ニ走ラバ假令統計上ノ成績良好ナリト雖力ナシ。我教室ニ於テハ開講以來日尚ホ深カラズ從テ例數多カラザルモ常ニ萬難ヲ排シ積極的切除ヲ勵行セシ爲メ姑息的胃腸吻合術或ハ三年以内再發者ノ平均延長命數等ニ於テハ諸家ノ成績ニ比シ多少劣レルモノ有リト雖這ハ末節ニシテ其本懷タル永久治癒成績ニ至リテハ一段ノ光輝ヲ放ツテ認メ吾々ノ最モ欣快トスル所ナリ。切除後滿三年ヲ經過セル二十名ニ就テ觀ルニ永久治癒ヲ得タル者七名卽チ三五・〇%ノ永治率ヲ得タリ他ノ十三名ハ不幸再發ヲ見タルモ平均命數一五・九ケ月卽チ切除ニ依リ五・一月ノ生命延長ヲ招來セリ。之レヲ諸大家ノ成績ト竝記セバ次ノ如シ。但シ永久治癒トハ現今一般ニ行ハルルフォン、フォルクマン氏ノ提唱セル滿三年以上無再發ニ經過シ健康ナル者ヲ謂フ。

術者	手術總例ニ對スル率	手術ニ堪ヘタル例ニ對スル率
コッヘル	一八・三%	—
ミクリッチ	一八・四%	三〇・〇%
キュットネル	一六・〇%	二六・〇%
三宅博士	二一・七%	三〇・五%
我教室	三五・〇%	三五・〇%

右ノ如ク我教室ニ於テハ手術總例ニ對スル率モ手術ニ堪ヘタル例ニ對スル率モ同一ニシテ直接死亡ヲ見ズ。

而シテ姑息的手術及永久治癒ヲ得ザル場合ニ於ケル切除ノ効果等ハ諸大家ノソレニ比シ劣ルモ永久治癒ニ於テ嶄然頭角ヲ表ハセルハ明ニ技術ノ拙ナルニハ非デ積極的切除ノ實行及其効果ヲ雄辯ニ物語ルモノナリ。

○內科的治療ニ依ル平均命數（三十九人）

	最短	最長	平均
	二ケ月	二十ケ月	一〇・七ケ月

○單開腹術後內科的療法ニ委シタル患者平均命數（十八人）

	最短	最長	平均
	三ケ月	二十ケ月	八・三ケ月

○切除不能ニテ吻合術ノミ施行セル患者ノ平均命數（十六人）

	最短	最長	平均
	二ケ月	十九ケ月	一〇・五ケ月

○永久治癒ヲ得ザル場合ニ於ケル胃癌切除ノ効果（二十名）

	發病ヨリ手術迄最短	發病ヨリ手術迄ノ最長	發病ヨリ手術迄ノ平均月數	手術ヨリ參年以內ノ再發ニ依ル最短死亡	手術ヨリ三年以內ノ最長死	手術ヨリ死亡迄ノ平均命數
	一ケ月	二十四ケ月	七ケ月	一ケ月	三十二ケ月	八・九ケ月

（發病ヨリ切除ヲ經テ再發死亡ニ至ル平均命數ハ十五・九ケ月ニシテ之レヨリ內科的治療ニ依ル場合ノ平均命數一〇・七ケ月ヲ差引キ五・二ケ月ノ生命延長ヲ認ム）

六、直接死亡及死因

我教室ニ於テハ胃癌手術ニ對シ常ニ局所麻醉ヲ勵行セルヲ以テ往昔ノ如ク麻醉死或ハ其影響ニ由ル合併症ト見做スベキモノ少ク直接死亡(術後一週間以内)ノ大半ハ癌ニ依ル全身衰弱ノ結果ト見ルベク百五十二名ノ胃癌患者中二十二名ノ直接死亡アリ。中十名ハ姑息的手術ニ在リ四五・四%ニ當ル又二十二名中十一名ハ虚脱死ニシテ是レ又姑息的手術ニ多キヲ見レバ積極的切除決シテ恐ルベキニ非ズ益々本切除術ノ普及セラレムコトヲ希フモノナリ。

直接死亡及死因

	切除術	姑息的手術	單開腹術	計
手術例	七六	三三	四三	一五二
直接死	九	一〇	三	二二
百分率	一一・八%	三〇・三%	〇・七%	一四・五%

	虚脱	腹膜炎	肺炎	内出血	其他	計
例數	一一	四	二	二	三	二二
百分率	五〇・〇%	一八・一%	九・〇%	九・〇%	一三・九%	

七、切除術

直接吻合術ハ最モ解剖的及生理的狀態ニ近ク望マシキ術式ナリト雖然モ現在ノ如キ理想的診斷法ナク又手術的療法ノ理解ニ乏シキ時代ニ於テ實行シ得ル機會實ニ稀ナリ。又强テ本法ヲ施行セント欲セバ勉メテ小範圍切除ヲ餘義無クセシメ從テ再發或ハ縫合不全ヲ招來シ不熟練ナル術者ニハ困難ナル場合多シ。

十二指腸斷端ヲ閉塞シ空腸ヲ横行結腸前ニ於テ切除部全部ニ亘リ吻合スルバルフォア氏法ハ直接吻合術ニ比スレバ稍々其趣ヲ異ニスト雖術式比較的簡單ニシテ確實ヲ期シ得ベク如何ナル廣範圍切除ニモ適シ手術時間ヲ短縮シ尚ホ治

癒後「レントゲン」線檢査ニ依ルモ其吻合部ハ良ク胃內容ノ排出ヲ調節シ恰モ幽門輪ノ如キ作用ヲ營メル者ヲ見ルコトアリ。サレバ强テ直接吻合ノ樣式ニ則ルノ要ナクバルフォア氏ノ術式ヲ施スモ決シテ治癒ノ上ニ影響シ或ハ將來消化障碍ヲ後貽スル等ノ事實ハ臨床上認メズ。

八、癌ノ種類及發生部位

癌ノ種類ニ關シテハ次表ノ如ク硬性癌及腺癌ヲ最多トシ豫後ノ上ニ於テモ亦兩者伯仲ノ間ニアリ。又幽門部ニ發スルコト最モ多ク其未ダ限局シ癒着ナキモノハ切除容易ニシテ成績可良ナリ。

	硬性癌	腺癌	單純癌	膚樣癌	膠樣癌	計
例數	三〇	二九	一三	八	四	八四
百分率	三五·七%	三四·五%	一六·七%	九·五%	三·六%	

レンネル氏ノ研究ニ依レバ胃癌屍ニ於テ腫脹セル胃領域ノ淋巴腺ノ半數ハ癌細胞ヲ含マズト然リ三宅博士モ亦其經驗アルヲ記載セラレ我教室ニ於テモ同樣ニ腫大淋巴腺ノ全淸掃不可能ナリシ場合或ハ胃壁浸潤ノ中ニ於テ切除シタリト思フ例ニ於テモ尙ホ良ク永久治癒ヲ得又ハ案外長期間再發狀態ヲ呈セザルヲ稀ナラズ經驗シ更ニ積極的切除術ノ効果ニ意ヲ强クスルモノナリ。

九、其他ノ外科的療法

胃成瘻術或ハ空腸成瘻術等モ少數例ニ施行セラレタルモ斯ノ如キハ外科家ノ進ンデ行ハントスルモノニハ非ズシテ吻合術ヲ行フト同樣精神ニテ特別ノ場合ニ施行スルニ止マリ又其効見ルベキモノナシ。

我教室ノ切除例ニ就キ永久治癒ヲ得シ患者ト得ザリシ患者ヲ比較スルニ老若、男女、癌ノ種類、發生部位或ハ胃液

所見手術々式等何レトシテ永久治癒ノ條件タルベシト見做シ得ベキモノナシ。殊ニ癌中惡性ナル膠樣癌患者ニ於テスラ永久治癒ヲ見タリト雖精細ニ觀察スル時ハ永久治癒者ハ發病ヨリ受術迄ノ期間平均六・四ケ月永久治癒ヲ得ザル人ハ平均七・〇ケ月其差僅々〇・六ケ月ニ過ギズ。而シテ此ノ中二例ニ於テ比較的長キ經過ヲトル硬性癌ノ存スルヲ見レバ先ヅ四ケ月乃至六ケ月ノ間ニ切除ノ機會ヲ得タル人ハ治癒ノ可能性大ナルモノト云フベキ乎。其確定タルヤ尙ホ今後ノ成績ニ俟ツコト大ナリ。

十、結論

胃癌ノ根治ハ胃切除術ノ他ナキモ其切除タルヤ企テ得ベキ有ラユル場合ニ於テ積極的ニ施行シ且ツ切除範圍ハ成ルベク廣範圍ナルヲ可トス。

慢性胃「カタール」ノ症狀ニテ適當ナル治療ヲ施シ月餘ニ亘リテ治セズ益々增惡ノ傾向アルモノハ先ヅ胃癌ノ疑診ヲ置キ宜シク診斷的開腹術ノ機會ヲ作ルベシ。

外科的對症療法ハ生命延長ノ効ヲ認メズト雖通過障碍ヲ治スルニ絕對的偉効ヲ奏ス。

根治ハ初發症狀ヨリ四—六ケ月ノ間ニ行ヒタル切除術ニ於テ多ク吾人ノ理想ハ之レヨリ更ニ早期ニ在リ。

胃癌ノ問題タルヤ素ヨリ內科或ハ外科ニ偏スベキニ非ズ相倚リ相助ケテ初メテ根治ノ目的ヲ達スル者ナレバ宜シク其軌ヲ一ニシテ早期手術ニ努力セザルベカラズ。

本統計的觀察ハ恩師泉先生ガ我北陸ノ地ニ內臟外科ノ開發ニ獻身的努力ヲ捧ゲラレテヨリ滿五ケ年間ニ於ケル我教室ノ胃癌手術成績ヲ虛飾ナク記載セルモノナリ。

擱筆ニ臨ミ懇篤ナル指導ト校閱トヲ賜ハリタル恩師泉先生ニ對シ深甚ナル謝意ヲ捧グ。